

資料タイトル： 戦後再開、または戦後始めたグループとその活動
作成者： J56 芥川博子
作成年： 2019 年
資料内容： 戦後に再開、または戦後に始めた卒業生によるグループとその活動について、グループ名とその再開時期、その活動内容についてまとめたもの
典拠資料： 卒業生会報、婦人之友、自由学園の歴史Ⅱ、幼児生活団指導者資料
『自由学園 100 年史』該当章： 第Ⅲ部第十二章
二次利用に際して： 閲覧のみ。二次利用についてはお問い合わせください。

戦後再開、または戦後から始めたグループとその活動

グループ名	再開時期	主な活動内容	備考	資料先
工芸研究所	1945年	戦災の救援活動が優先課題だったこの時期に、文化活動の必要性を2回生羽仁説子が呼びかける。「美術工芸講座」「洋裁基礎講習」の講習会に若い女性が400人参加する。「経済的にも精神的にも荒廃している戦後の日本を建て直すためには女性の意識を高めなければならない。」という考えである。これが戦後の再開となり、生産の道を歩み始める。		婦人之友 1945年10月号 卒業生会報42号(1969年3月)
食事グループ	1946年	10回生のクラス会での話し合いから何か役立つことがしたいと「食」のことを始める。有り合わせの材料でできる料理や配給のものを少しでも美味しく食べる工夫を研究。1951年の自由学園創立30周年でクッキーを作り、今でも食事部のクッキーとして人気の商品である。		戦前の消費組合の活動の中に、食の働きもあったが、それとは別のもの。 卒業生会報41号(1968年11月)105号(1990年7月)
自由学園生活学校	1948年	全国から高等女学校を卒業した60名が第1回生となる。衣食住の運営に必要な知識を身につけるために、自治と協力を基とした生活を目的とした。(初期は1年制、後、2年制) 5回生小山博子、10回生渡善子はじめ卒業生が交代で指導にあたる。		1973年まで続く ¹ 。 卒業生会報56号(1973年6月)
友の会幼児生活団	1940年代後半～ 1950年代前半	1938年の「幼児生活展覧会」が回った地方を中心に創設された友の会幼児生活団。戦後の混乱期であっても子どもたちにより生活をさせたいという思いから各地で再開の道をたどる。(第Ⅱ部各部教育 幼児生活団) 卒業生も友の会と一緒に指導者としてその責任にあっている。		「幼児生活団指導者研究会の記録」
消費組合	1952年	女子最高学部1回生(30回生)が卒業勉強で取り上げた「学園の消費と生産」により、自由学園消費組合が再発足。また、それとは別に明日館の消費組合では、戦後の見栄えばかりの衣料から安心して使えるものが欲しいと衣の研究が始まる。もと子の予定生活の考えから年2回の衣料を中心とした予約、販売を行っていた。		卒業生会報39号(1968年3月)

¹ 「自由学園の歴史Ⅱ」1948年自由学園生活学校開校 286頁